

2019.3
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 富薬

3号

第41巻
No.356



ニワトコ *Sambucus racemosa* L.subsp. *sieboldiana* Hara (スイカズラ科 *Caprifoliaceae*)

生薬 セッコツボク（接骨木） 秋に茎を採取し、陽乾する。他に根（接骨木根）、花（接骨木花）、葉（接骨木葉）も利用する。

成分 トリテルペノイド：oleanolic acid、ursolic acid、 α -amyrin、タンニン、樹脂、ステロール類。

効能 茎、根、花、葉ともに下熱、鎮痛、消炎、利尿、止血薬として水腫、腎炎、咽喉痛、痛風、諸出血、産後の悪血に用いる。打ち身、骨折に外用。神経痛、間接リウマチに浴湯料として。

生薬 ニワトコ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



本州、四国、九州、奄美大島、朝鮮、濟州島、中国の山野に普通に自生する落葉低木で、茎は根元から多数叢生します。新しい枝は緑色で、次第に淡褐色に変わり、木化した茎の中心にある太くて柔らかい髓は、植物の組織などを挟んで顕微鏡観察用の薄い切片を作るときに用いています。葉は奇数羽状複葉で対生し、5-7枚の長楕円形、鋸歯縁の小葉からなります。早春に新芽とともに枝先に淡黄白色の花を円錐花序に多数咲かせます。果実は球形の液果で、夏ごろ紅色に熟します。

万葉集に「古事記に曰はく、輕太子、輕太郎女に紆あやく。故、その太子を伊予の湯に流す。この時、衣通王、恋慕に堪へずして追ひ往く時に曰はく（君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ）[ここに山たづと云ふは、今の造木なり]」とあり、「山たづ」はニワトコの葉が対生している様子から「迎へ」の枕詞に用いられたと考えられています。『和名抄』（931-937）に「接骨木、和名美夜都古木」とあり、『医心方』（984）にも「和名 美也都古岐」と記されています。「山多豆」、「造木」、ミヤツコギになり、訛ってニワトコになったとも言われています。

江戸時代の『大和本草』（1709）には「接骨木葉は陸英（ソクズ*S.chinensis*）に同じ。木はウツギ（*Deutzia crenata*）に似て其の中心空虚なり。外治に餅湯。折傷を治し、筋骨をつぐ」と「タツノキ」の別名が記され、葉が対生している様子から鶴が羽を広げた形に見立てて「鶴たづの木」から命名されたものと考えられています。漢名の接骨木は『図経本草』（1062）に「接骨木とは功を以て名けたものである。花、葉が都つくすて萌蘗、陸瑛、水芹などに類するところから、一名木萌蘗もくつくすという」と薬効から名づけられたと言われ、木本性の萌蘗であると言っています。萌蘗の初出は『名医別録』（502-536）で「萌蘗、味酸、温、毒あり。風瘙癢疹（蕁麻疹）、身痒、濕痺を主る。浴湯を作るべし。一名董草、一名菝、田野に生ず。春夏に葉を採る。秋冬に茎、根を採る」とあり、草本性のソクズについて述べているものと考えられます。ソクズ（陸英、萌蘗）は『本草和名』（918）、『和名抄』に「萌蘗、和名曾久止久」と漢名の「サクダク」がなまった古和名「ソクトク」が記されています。ソクズ（クサニワトコ）は冬には地上部が枯れる多年草である以外に地下茎を四方に張り巡らし、春になると高さ1-1.5mの茎を地下茎から延ばし、群生します。葉は対生し、よくニワトコに似ていますが、花は7-8月に茎頂に大型の散房状集散花序をつけます。

ヨーロッパにおけるエルダー（セイヨウニワトコ*S.nigra*）は「田舎の薬箱」と呼ばれ、万能薬とされていました。ディオスコリデスの『薬物史』（40-90）には「アクテAkte」の名で「木性で、丸くて中空で白っぽく、かなりの長さがあり、アシに似た枝をもつ」と木本性のセイヨウニワトコと思われる植物と「カミアクテChamaiakte」の名で「小草の形で小さく、草らしい四角い断面の茎をもち、節が多数ある」と草本性の*S.ebulus*と思われる種について用い方などを細かく説明されています。葉以外にもヨーロッパではよく知られた樹木で、枝の髓が抜きやすく、中空になることから子供たちは空気鉄砲を作って遊び、また火をおこすための火吹きとして用いたことからアングロサクソン語でエルド（oeld炎）と呼ばれ、エルダーの語源になったと言われています。属学名の*Sambucus*もギリシアの古代楽器sambuceというトロンボーンに似た楽器に由来すると言われています。伝説や迷信、民話も多く、キリストを裏切ったユダがしばり首になった木とされ、キリストの十字架を作った木ともされ、神聖な木として切ることが恐れられていました。（村上守一 記）